

創刊に あたって

森田慶一は、建築論の課題を「建築とは何か」を問うことだとした。その森田の問いを引き継いだ増田友也は建築論を建築の原初の問いへと突きつめ、建築が生まれ出るその間際を現象学的に、そして存在論的に探求した。二人の先学が教えているのは、建築論とは研究対象を指し示すものではなく、研究の道だということである。つまり二人は建築のアルケーの探求を建築論の目標としてその生涯を送った。その結果、建築論は果てしなく広がり、同時に研究領域を融解させかねない困難を抱え込むことになった。

研究は個別的な建築的事象から始めるほかない。工学に属する建築学に具体的で実践的な研究が求められるのは必至である。しかし、森田と増田が切り拓いた建築論はこうした工学的知をはるかに逸脱している。工学ではつくられる物の本質は前提されているが、それに対して「建築とは何か」という問いは、建築の本質だけでなく、建築の価値までも問題にしている。つくられたものの価値というのは、物自体のなかにあるのではなく、物と人間とのあいだに生まれるものである以上、建築の価値の問いは人間のあり方、人間の存在理由にまで広がってしまう。それはもはや哲学に踏み込むことになるだろう。建築論は建築学と哲学のあいだの際どい境界に成立している。しかしそれは建築学の基盤であり、中心であるとも言えるのだ。

21世紀に入って思想や批評が退潮し、即効性のある実用的研究の要請がますます強まるなか、あえて建築のアルケーを討議する新たな場所として『建築論研究』を創刊することにした。そもそもアカデミズムというのは物事をじっくりと自由に突きつめて考え、その考えを自由に論じ合う場のことを言うのではなかったのか。「対話」を意味するギリシア語の dialogos には dia という接頭辞が含まれるが、これは「二対」ということではなく、「あいだを通して」という意味だという。つまり、多数のあいだを通る言葉が dialogos であった。建築のアルケーに向かって考える研究者が自由に考えを披露し、何の制限もなく討議を繰り広げることができる場所。本誌がそのような本来の意味でのアカデミックな言論空間となることを願っている。

田路 貴浩